



Graduate School of

Information and Communication

情報コミュニケーション研究科

既存の学問の枠組みを超え、
情報社会における
新たな「教養」を創造

21世紀に入り、高度情報社会は急速に発展を遂げつつあります。その有用性は否定すべくもありませんが、それと同時に新たな社会問題や喫緊の課題も生じており、広範で高度な判断や対応が求められています。情報コミュニケーション研究科では、高度情報社会における人間とコミュニケーションの態様を、学際的に探究することを目指しています。学際的あるいは領域横断的という考え方は、言うのは簡単ですが表現するのはなかなか難しい理念です。単に、「さまざまな分野の専門家」が寄り集まるのではなく、一人ひとりが特定の学問の核を持ちつつ、関連分野にも精通することが必要です。学問は現実と遊離しては意味をなしません。単なる机上の空論や先人の思想の追従に終わることなく、現実あるいは世界・社会の「いま」としっかり向き合っ、立ち向かう姿勢が求められます。政治的・経済的にも思想的・学問的にも閉塞感が漂ういまこそ、こうした状況を打破する新しい視点、いわゆる「科学革命」が求められています。

本研究科は、2019年に開設10周年を記念し、シンポジウム「現代社会と向き合う国際化と多様性」を開催しました。取り上げたテーマはフェイクニュースや移民問題、舞踊等広範にわたり、本研究科の学際性を具現化するとともに、複雑化する社会の「いま」を象徴するものであったと言えるでしょう。情報コミュニケーション研究科では、「学際」を目指し、「いま」と向き合う人材を求めています。

大学院事務室（グローバルフロント5F）

※事務取扱時間（開室時間）はHPで確認してください。

電話 ☎ 03-3296-4285 Mail ✉ jokomiken@mics.meiji.ac.jp

※休業期間やイベント等により開室時間は変更となる場合があります。



情報コミュニケーション研究科
Webページ

https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/index.html



入学者の受入方針
（アドミッション・ポリシー）

https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/policy/graduate_ap.html



教育課程編成・実施方針
（カリキュラム・ポリシー）

https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/policy/graduate_cp.html



学位授与方針
（ディプロマ・ポリシー）

https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/policy/graduate_dp.html

● 人材養成その他の教育研究上の目的

情報コミュニケーション研究科

高度情報社会の進展に伴い社会や社会が抱える問題は複雑化の一途をたどっているにもかかわらず、アカデミズムは、それに対する十分に有効な処方箋を提示するには至っていない。情報コミュニケーション研究科では、各分野の専門家が問題意識や提案を持ち寄り、「情報コミュニケーション」という視座から、複雑化した高度情報社会を様々な角度から検討した後に再び自己の専門領域にフィードバックできる「場」を創設することを目的とする。すなわち、教育の面においても研究の面においても「パラダイム転換型」又は「パラダイム創出型」の研究科となることを目指す。

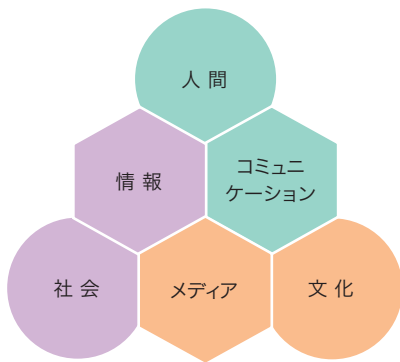
情報コミュニケーション学専攻

高度情報社会の諸課題に取り組むために、情報コミュニケーション学専攻では、既存の専門研究によっては全体像がとらえきれなかった21世紀の諸問題を、学際的・領域横断的に把握・定式化し、有効な学問的・政策的ポートフォリオを自ら案出できる確固たる判断基準を持った研究者や実務家の養成・輩出を目指す。そのために、専門的なディシプリンの習得と並行して、早い段階から学生を研究プロジェクトに参画させ具体的な問題への学際的アプローチを実践させる。博士前期課程では、そうした学際的・領域横断的な視野と高度な専門的知識を有する人材を養成し、研究者に限らず社会に活躍しうる社会人の養成も目指す。博士後期課程では、それぞれの研究分野の更なる深化を図りつつ、学際的・領域横断的な視野をもって自らの専門分野で活躍できる研究者を養成する。

● カリキュラム

情報コミュニケーション研究科は新しい「学際」のあり方に基づいて、教育課程を編成しています。その特色は、学際研究への参加、学際的な教育・研究成果の発信、そのために必要な研究技法の習得、という3つの柱です。

『学際空間』としての専門領域研究



学際研究への参加

「学際」研究は、過去の学問的な蓄積をきちんと踏まえることなしには実践できません。したがって情報コミュニケーション研究科では、まず大学院生に、「社会」「文化」「人間」のいずれかの領域に拠点を置き、自らの核となる知識や研究手法を身につけてもらいます。その上で「社会」「文化」「人間」の3つの専門領域を底辺に、「情報」「メディア」「コミュニケーション」の各領域へと展開する「学際空間」の内部で、それぞれが興味と問題関心を抱くテーマについて、他領域の知的資源も活用しながら自由に、そしてアカデミックに研究することができます。

学際的な教育・研究成果の発信

学際的な教育・研究の成果を広く発信するために、大学以外の諸機関とも連携を図り、開かれたアカデミズムを学際共同研究プロジェクトとして設置しています。大学院生はこのプロジェクトのいずれかに参加可能であり、そこで今日的な課題の解決に学問的に取り組み、研究成果を発信する場を持つことができます。

学際研究のための技法の習得

以上のような学際研究や活動に必要な研究技法を教授する、「集約型外国文献講読」（英語・ドイツ語・フランス語）、「フィールド・アプローチ」「アカデミック・ライティング」「専門社会調査」といった研究サポート科目群を設置しています。

■ 博士前期課程 科目一覧

テーマ・カテゴリー			研究サポート
情報・社会	メディア・文化	人間・コミュニケーション	
行動経済学、公共政策、メディア技術と社会、情報科学、知的財産法、国際関係論、現代政治学、組織社会学、経済社会学、ジャーナリズム論、現代型犯罪と刑法、社会システム論、情報法、科学と社会、開発経済学、憲法史、イノベーションの実証分析、学校社会学、災害社会学、環境行政学	社会文化史、メディア社会史、比較文化・比較文化論、表象文化論、ジェンダー論、超域文化論、宗教と政治、マルチ・カルチャリズム、科学史・科学哲学、都市・空間論、演劇学	組織コミュニケーション論、認知情報論、説得コミュニケーション論、家族社会学、異文化間コミュニケーション、生命論、人類学と意識科学、現代思想論、社会的人間学、公圏・親密圏コミュニケーション、心理学の哲学、社会心理学、言語学	集約型外国文献講読（英語・ドイツ語・フランス語）、フィールド・アプローチ、アカデミック・ライティング、専門社会調査

※ 2026年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

■ 博士後期課程 科目一覧

年次	必修科目	共通必修科目
1年次	研究論文指導Ⅰ 春学期 2単位 研究論文指導Ⅱ 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ 春学期 2単位 情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ 秋学期 2単位
2年次	研究論文指導Ⅰ 春学期 2単位 研究論文指導Ⅱ 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ 春学期 2単位 情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ 秋学期 2単位
3年次	研究論文指導Ⅰ 春学期 2単位 研究論文指導Ⅱ 秋学期 2単位	情報コミュニケーション学学際研究Ⅰ 春学期 2単位 情報コミュニケーション学学際研究Ⅱ 秋学期 2単位

※ 2026年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

履修モデル紹介

真の「学際」研究をシミュレーション

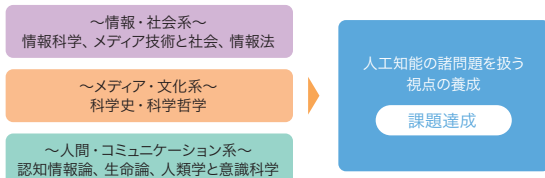
具体的な課題に対して、情報コミュニケーション研究科が用意する3つのテーマ・カテゴリーからどのような科目を選び、どのように多面的なアプローチを行いながら、「学際」研究を実践していくのかシミュレーションしてみましょう。

事例1 人工知能

近年の技術革新により、人工知能の性能が格段に上がり、2045年には人工知能が人間の知能を大きく凌駕し、人間の仕事のほとんど全てが人工知能に置き換わる「シンギュラリティ」の時代が到来するとまで言われています。私たちは、人工知能と人間が共存する社会について、考えなければならない時期にきているでしょう。

本研究科では、「情報科学」によって人工知能技術の基本をおさえ、「メディア技術と社会」で技術による社会変化を扱います。また、「情報法」では人工知能が暴走したときの法的問題を、「科学史・科学哲学」では科学技術の進歩と人間社会の関係を歴史的な時間軸で俯瞰します。さらに、「認知情報論」では人工知能と人間の思考の相違点を明確にし、「生命論」では機械に生命が宿る可能性を探る手がかりを学びます。「人類学と意識科学」では脳の仕組みと人間の営みを通して機械的人間観の問題を探ります。

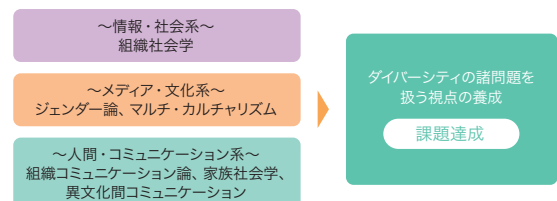
まさに人工知能の諸問題を射程においた学際的な視点を築くカリキュラムが備わっています。



事例2 ダイバーシティと共に働く

安全やよりよい生活を求め、人々はかつてないほど大規模に国境を越えて移動しています。日本も例外ではなく、仕事や教育のために国外に行く者、逆に仕事や留学で来日する者が増えています。また、日本では少子高齢化による労働人口の減少により外国人や女性、高齢者の活躍が期待され、私たちが働く場はかつてないほどダイバーシティに富んだものになるようとしています。

本研究科では、「ダイバーシティと共に働く」ことにまつわる諸問題を学際的に学ぶことができます。「組織社会学」や「組織コミュニケーション論」では、組織文化や組織における対人コミュニケーション、動機付けなどの組織や組織における行動について、「ジェンダー論」では、ジェンダーがいかに私たちの文化・社会の中で構築されていくのかを学びます。「家族社会学」では、女性の移民や労働や、それに伴う家族への影響、そして「異文化間コミュニケーション」では、異なる文化的背景を持つ同士が接触・協働する場面に起こりうる諸問題を扱います。



授業科目ピックアップ「学際」研究を実践

情報・社会系

災害社会学

小林 秀行 教授 →P.97

気候変動の影響が強まる近年、災害は多くの人々が関心を持つ現象となっています。災害社会学では事前対策から復興、そして慰霊や継承に至るまで、災害を一つの社会過程と捉え、災害と社会の関係性を制度やコミュニティ、情報利用といった側面から明らかにする作業を続けてきました。このような作業は、社会が実践的な対策を構築していくための理論的基盤として活用されます。研究室ではまず災害研究の全体を広く捉え、そこからそれぞれの、人を生かす足場を作る研究を展開していきます。

メディア・文化系

演劇学

日置 貴之 教授 →P.98

演劇は、人間の身体や言語といったメディアによって何らかの意味の伝達がおこないます。そこで伝えられる内容には、極めて深刻な哲学的問題から多数の観客を単純に喜ばせることを目的とする娯楽的物語もあり、演劇には強く芸術を志向するものもあれば政治的プロパガンダを意図するものもありますが、いずれも作り手と観客・社会との関係の中に成立するものだといえます。過去の人類による演劇という営為の分析は、現在、そして未来の私たち自身と社会について考えることにつながるのです。

人間・コミュニケーション系

言語学

坂本 祐太 准教授 →P.99

本研究室では、言語学の中でも生成文法理論の枠組みに基づいた比較統語論研究を行っています。例えば英語と日本語は文法的に大きく異なった言語であると一般的に考えられていますが、実は多くの点で文法現象を共有していることが先行研究によって明らかになっています。近年は、音声のない主語・目的語(日本語の「食べた?」のような文)に関して、特に東アジア諸語の言語を中心に調査を進め、言語横断的にその統語的特性を明らかにするために日々研究を推進しています。

研究サポート

集約型外国文献講読(ドイツ語)

宮本 真也 教授 →P.99

研究は日本語と英語で十分というわけにはいきません。少なくとも人文・社会科学の領域で研究するならばこれは3つの点で誤っています。確かに多くの重要な研究は英語か日本語に翻訳されていますが、研究の世界では翻訳に依存しては面白く新奇なものに出会えません。また、専門によりますが、個別の言語を習熟し、テキストを生きたかたちで理解することは大事です。そして、なによりも大学(university)の理念は、普遍性(universality)にあります。あらゆる知を包括しうる場所が大学であり、その基本言語が限定されていなければなりません。面白い研究に出会うためにも、英語以外の外国語の習熟は必要です。

●● 研究プロジェクト

情報コミュニケーション研究科では、学際的で独自の研究を志す大学院生を広く募集していますが、以下に示す研究プロジェクトに参加しながら、研究を進めることもできます。参加希望者は、該当研究プロジェクトを担当する研究指導をもつ教員にコンタクトしてください。

なお、研究プロジェクト参加にあたっては、プロジェクト関連科目に関する知識や、参考文献の理解が必要となります。

現代アメリカ研究

本研究プロジェクトでは、本研究科の担当教員だけでなく、他学部教員とも連携して現代アメリカの「分断」を学際的な視点から問う試みを行っています。2024年度には、大学院授業や研究会、研究科フォーラムなどを通じて、2024年アメリカ大統領選挙に向けて、大学院生の皆さんとも活発な討論を行う機会を提供しました。現代アメリカ政治・社会に関心のある院生の皆さんは、ぜひ積極的に研究活動に参加してください。

担当教員

清原 聖子 教授 →P.97
鈴木 健 教授 →P.99

研究テーマ

- 現代アメリカの“分断”に関する学際的研究
- 大統領選挙キャンペーンの研究

活動実績

- 2024年度研究科フォーラム「アメリカ民主主義の危機 異例ずくめの2024年大統領選挙」を企画、研究発表 (https://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/forum2024.html)
- 清原聖子、鈴木健、兼子歩、下斗米秀之（編著）『アメリカの〈分断〉とは何か—学際的視点からその諸相を探る』（大学教育出版、2025年）

関連科目

現代政治学／説得コミュニケーション論

越境と家族

グローバル化の進展に伴い、地域や国を越えて移動する個人や家族が増えています。移動の動機や原動力は何か、移動先（ホスト社会）での問題や課題は何か等を一緒に研究してみませんか。

担当教員

根橋 玲子 教授 →P.99
施 利平 教授 →P.99

研究テーマ

- 日本で就労・生活している外国につながる人々に関する研究（子どもの教育戦略／子育てとのバランス／キャリアと家庭／アイデンティティ／日本の職場文化と適応／ライフコースの多様性と定住／定住・帰国の選択／世代間関係と結婚・出産／日本の移民政策／多文化共生社会）

活動実績

- 中国と韓国にルーツをもつ高学歴女性のキャリア・オリエンテーションモデルの構築（科研費基盤研究（C）2024-2026）
- 明治大学国際・ダイバーシティ教育研究所 (<https://sites.google.com/view/meiji-university-riide/>)

関連科目

異文化間コミュニケーション／家族社会学

科学・社会・コミュニケーション

一般市民の科学理解を向上させる活動を行っています。科学について、特に科学的方法論とその限界について深い理解を目指し、社会的活動をアクティブにできる大学院生を募集しています。

担当教員

石川 幹人 教授 →P.98
蛭川 立 准教授 →P.99
宮本 真也 教授 →P.99

研究テーマ

- 疑似科学広告を用いた消費者リテラシー教育
- ハイパーメリトクラシー時代における疑似科学
- 命の選別と価値づけ～人格の承認と優生思想
- 疑似科学信奉の認知心理学的背景
- 日本における補完代替医療の受容と現状

活動実績

- 疑似科学を科学的に考えるサイト (<https://gijika.com>)
- 明治大学科学コミュニケーション研究所 (<https://gijika.com/archive/sc/>)

関連科目

認知情報論／現代思想論／人類学と意識科学

2025年度 修士論文テーマ [抜粋]

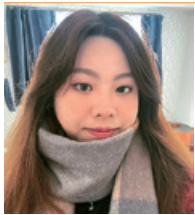
- ▶ 「一带一路」は国際秩序変動の触媒か
— 米国主導リベラル秩序への挑戦 —
- ▶ 「応援の気持ち」はどのように「収益」へ結びつくのか
— ユーザー参加型二次元コンテンツ『Paradox Live』の分析 —
- ▶ 組織と個人の柔軟性とパフォーマンスに関する実証分析
- ▶ 研究チームの多様性とイノベーション・パフォーマンスに関する日中比較
- ▶ ロックダウン下の上海における社区團購の可能性
— 災害コートピアとレジリエンスの接続を視点として —
- ▶ ネット炎上問題に関する考察
— 若者のメディア接触の視点から —
- ▶ 「和食」はいかに構築されたか
— 戦後『主婦の友』における家庭料理言説の変容 —
- ▶ 中国SNSにおけるフェミニズム的言説とアイデンティティの形成
— 豆瓣グループ「小象樂園」を中心に —
- ▶ 炎上事件の炎上参加者について
— ネガティブな発言をしているユーザーの特徴 —
- ▶ 社交ダンスの発展と受容における日中比較
- ▶ 梨園戯における女性役上肢の特性
- ▶ 1970年代から1990年代の日本における「女性同士の友情」を巡る言説
— 女性雑誌『anan』を事例に —
- ▶ 現代中国の若年層における日本のサブカルチャーの受容とエンパワーメントの関係について
— 中国のSNSにおけるギャルファッションの投稿分析を事例に —
- ▶ 中国における「皆婚社会」の揺らぎと個人化の進行
— 未婚女性のライフストーリーに着目して —

近年の博士学位授与

課程博士

学位の種類	論文タイトル	授与年度
博士(情報コミュニケーション学)	横光利一による日本近代小説の心理改革 — 視覚中心主義に根差した「意識」から触覚中心主義に依拠する「情動」へ —	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	現代日本社会における母親規範とその画一性に関する研究 — ギャルママのファッションと育児を事例に —	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	非近代的社会における監視実践 — 統治の技法から自己の(配慮)へ —	2021年度
博士(情報コミュニケーション学)	ライフコースからみる現代中国女性の親子関係と家族意識 — 浙江省紹興市に在住する一人娘の例を通して —	2022年度
博士(情報コミュニケーション学)	大学生の異文化接触とキャリア発達: 異文化アジリティを育む海外インターンシップの意味	2023年度
博士(情報コミュニケーション学)	調停離婚のDX化に向けたチャットボット開発と社会実装に向けた研究	2025年度

院生からのメッセージ



丁 熊瑶

DING Xiongyao

情報コミュニケーション学
専攻
博士前期課程 2年

学びの中で、世界の多様な視点に触れる

私はSNSを通じた異文化交流と若者のアイデンティティについて研究しています。海外の文化に触れると、人の考え方や自己認識がどう変わるのかに興味を持ち、もっと深く学びたいと思って大学院に進学しました。明治大学にはたくさんの留学生がいて、授業内外で交流を楽しみながら、世界中のさまざまな文化や考え方に触れられます。多文化的な環境は研究を深めるだけでなく、多様な価値観を持つ仲間と出会える貴重な場だと感じています。

博士前期課程 Master's Program

Q 師事している教員は? A 江下 雅之 教授

江下先生の研究室では、雑誌やSNSなど身近なメディアを切り口に自由に研究を進められます。自分の関心を深められる一方で、困ったときには先生がしっかり支えてくださるので安心です。落ち着いた雰囲気の中で学びを楽しめる研究室です。

教員情報 P.98



平山 朝之

HIRAYAMA Tomoyuki

情報コミュニケーション学
専攻
博士後期課程 2年

インターネット社会の抱える課題に挑むために

私は、インターネット社会において生じる課題に関心があり、それを世の中に問いかけることができる存在になるため、博士後期課程に進学しました。現在は、インターネット上の誹謗中傷に関する研究を行っています。誹謗中傷は、それに至る要因、プラットフォームの設計、法制度の整備など、分野横断的に解決方法を探っていく必要があります。このような現代社会の抱える課題に挑むうえで、多様な専門分野の教員や学生が集まる情報コミュニケーション研究科は、最適な環境であると自負しています。

博士後期課程 Doctoral Program

Q 師事している教員は? A 塚原 康博 教授

塚原康博研究室では、現代社会の抱える課題に対する実証分析を行っています。扱うテーマは、デジタル化、グローバル化、少子高齢化など多岐にわたっており、各自の関心に応じて決定することができます。また、研究方法として、アンケート調査や統計解析の正しい手法を身につけることができる点も、大きな強みです。

教員情報 P.97

教員一覧

情報・社会系

※ 2026年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。
 ※ 各教員の研究指導の学生募集の有無については、入学試験学生募集要項公開時の研究指導教員一覧表で確認してください。

■ [情報・社会系 教員一覧 >>>](#)



阿部 力也

ABE Rikiya

博士(法学)
教授

研究
分野

刑法

【最終学歴】明治大学大学院
 【担当授業科目】現代型犯罪と刑法
 【研究テーマ】共同正犯の構造に関する比較法的アプローチ、正犯と共犯の区別問題



今村 哲也

IMAMURA Tetsuya

博士(法学)
教授

研究
分野

知的財産法

【最終学歴】早稲田大学大学院
 【担当授業科目】知的財産法
 【研究テーマ】過去のコンテンツ資産の権利処理の円滑化と利用促進に関する総合的研究/地理的表示の保護に関する研究



清原 聖子

KITOHARA Shoko

博士(法学)
教授

研究
分野

アメリカ政治、情報政策論

【最終学歴】慶應義塾大学大学院
 【担当授業科目】現代政治学
 【研究テーマ】アメリカ政治とメディア、大統領選挙キャンペーン



後藤 晶

GOTO Akira

博士(情報コミュニケーション学)
准教授

研究
分野

行動経済学・社会情報学・実験/計算社会科学

【最終学歴】明治大学大学院
 【担当授業科目】行動経済学
 【研究テーマ】ゲーム実験による自発的貢献行動の研究、行動経済学の社会実装に関する研究



小林 秀行

KOBAYASHI Hideyuki

博士(社会情報学)
教授

研究
分野

災害社会学、災害情報論

【最終学歴】東京大学大学院
 【担当授業科目】災害社会学
 【研究テーマ】防災・減災、災害復興、災害情報、記憶と継承



島田 剛

SHIMADA Go

博士(学術)
教授

研究
分野

国際経済学、開発経済学、
国際関係論・国際協力

【最終学歴】早稲田大学大学院
 【担当授業科目】開発経済学
 【研究テーマ】開発経済、産業開発、ソーシャルキャピタル、
国連研究、災害復興



清水 晶紀

SHIMIZU Akinori

教授

研究
分野

行政法学、環境法学

【最終学歴】上智大学大学院
 【担当授業科目】環境行政法
 【研究テーマ】行政活動の不作為に対する法的統制、
原子力行政の実態分析とその法的統制



鈴木 健人

SUZUKI Taketo

博士(政治学)
教授

研究
分野

国際関係論研究、国際安全保障、冷戦史、
アメリカ外交

【最終学歴】学習院大学大学院
 【担当授業科目】国際関係論
 【研究テーマ】G・ケナンの封じ込め構想の研究、
および米英同盟とその世界戦略を中心に冷戦史を研究



鈴木 雅博

SUZUKI Masahiro

博士(教育学)
教授

研究
分野

学校組織研究、教育社会学、教育経営学、
教育行政学、エスノメソロジー

【最終学歴】東京大学大学院
 【担当授業科目】学校社会学
 【研究テーマ】学校組織における教師間相互行為分析



大黒 岳彦

DAIKOKU Takehiko

教授

研究
分野

メディア、情報社会の哲学的思想的研究

【最終学歴】東京大学大学院
 【担当授業科目】メディア技術と社会
 【研究テーマ】身体メディア論、
電子メディア論を軸とした「メディアの基礎理論」の構築



竹中 克久

TAKENAKA Katsuhisa

博士(学術)
教授

研究
分野

理論社会学/組織研究

【最終学歴】神戸大学大学院
 【担当授業科目】組織社会学
 【研究テーマ】組織とコミュニケーションの理論的考察/組織における文化とシンボルの社会学的研究



田村 理

TAMURA Osamu

博士(法学)
教授

研究
分野

憲法学、フランス憲法史

【最終学歴】一橋大学大学院
 【担当授業科目】公共政策
 【研究テーマ】フランス革命期における憲法が
政治・社会・文化に与えた影響の研究



塚原 康博

TSUKAHARA Yasuhiro

博士(経済学)
教授

研究
分野

高齢社会の公共政策/人間行動の経済学

【最終学歴】一橋大学大学院
 【担当授業科目】公共政策
 【研究テーマ】デジタル化、グローバル化、
少子高齢化社会における公共政策の実証分析

**中里 裕美**

NAKAZATO Hiromi

博士(社会学)
教授

研究分野 経済社会学、社会ネットワーク論、地域研究

【最終学歴】立命館大学大学院
【担当授業科目】経済社会学
【研究テーマ】新しい経済社会学にもとづく地域通貨の社会ネットワーク分析**山内 勇**

YAMAUCHI Isamu

博士(経済学)
教授

研究分野 イノベーションの経済学

【最終学歴】一橋大学大学院
【担当授業科目】イノベーションの実証分析
【研究テーマ】日本企業のイノベーション・マネジメント、知的財産制度の実証分析**山崎 浩二**

YAMAZAKI Koji

博士(工学)
准教授

研究分野 VLSIの故障検査に関する研究

【最終学歴】明治大学大学院
【担当授業科目】情報科学
【研究テーマ】VLSIの論理故障に対する診断手法の研究**メディア・文化系**

※ 2026年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

※ 各教員の研究指導の学生募集の有無については、入学試験学生募集要項公開時の研究指導教員一覧表で確認してください。

■ [メディア・文化系 教員一覧 >>>](#)**江下 雅之**

ESHITA Masayuki

教授

研究分野 社会ネットワーク論/メディア史/
ポピュラー文化/女性誌史【最終学歴】エッセック経済商科大学大学院
【担当授業科目】超域文化論/メディア社会史
【研究テーマ】メディア史/雑誌のソーシャル・メディア的機能/ユース・サブカルチャーズとメディアの関係/日仏の女性誌史比較**高馬 京子**

KOMA Kiyoko

博士(言語文化学)
教授研究分野 超域文化論、言語文化学、メディア言説分析、
文化記号論【最終学歴】大阪大学大学院
【担当授業科目】超域文化論/集約型外国文献購読(フランス語)
【研究テーマ】クリティカルファッションスタディーズ、日本とフランスにおけるファッションとジェンダー表象**須田 努**

SUDA Tsutomu

博士(文学)
教授研究分野 社会文化史・
異文化コミュニケーション史・民衆史【最終学歴】早稲田大学大学院
【担当授業科目】社会文化史
【研究テーマ】日本近世・近代における社会文化と民衆思想/暴力の社会史/日朝異文化交流史**関口 裕昭**

SEKIGUCHI Hiromi

博士(文学)
教授研究分野 近現代ドイツ文学・文化(音楽・美術も含む)/
ユダヤ文化史/日独比較文学【最終学歴】慶應義塾大学大学院/京都大学大学院
【担当授業科目】比較文学・比較文化
【研究テーマ】ドイツ近現代史におけるユダヤ人問題について多角度から研究**田中 洋美**

TANAKA Hiromi

博士(社会学)
准教授

研究分野 ジェンダー研究、メディア/文化研究

【最終学歴】ルール大学(ドイツ)
【担当授業科目】ジェンダー論
【研究テーマ】メディア、テクノロジーのジェンダー分析**波照間 永子**

HATERUMA Nagako

博士(学術)
教授

研究分野 舞踊学/身体表現論/芸術実践論

【最終学歴】お茶の水女子大学大学院
【担当授業科目】表象文化論
【研究テーマ】東アジア舞踊の比較研究/
舞踊家オーラル・ヒストリー**日置 貴之**

HIOKI Takayuki

博士(文学)
教授

研究分野 演劇学・日本演劇研究

【最終学歴】東京大学大学院
【担当授業科目】演劇学
【研究テーマ】江戸時代後半から明治時代の演劇(歌舞伎)における災害や戦争の描写など**横田 貴之**

YOKOTA Takayuki

博士(地域研究)
教授研究分野 中東地域研究、現代中東政治、比較政治学、
国際関係論【最終学歴】京都大学大学院
【担当授業科目】宗教と政治
【研究テーマ】現代中東政治、イスラーム主義研究**人間・コミュニケーション系**

※ 2026年4月1日時点のものです。今後変更や見直しを行う場合があります。

※ 各教員の研究指導の学生募集の有無については、入学試験学生募集要項公開時の研究指導教員一覧表で確認してください。

■ [人間・コミュニケーション系 教員一覧 >>>](#)**石川 幹人**

ISHIKAWA Masato

博士(工学)
教授

研究分野 マインドサイエンス/人工知能論

【最終学歴】東京工業大学大学院
【担当授業科目】認知情報論
【研究テーマ】意識や心の自然科学的かつ哲学的究明、および疑似科学論、科学コミュニケーション、科学リテラシー教育



岩渕 輝

IWABUCHI Akira

博士(薬学)
教授

研究
分野 生命論/生命思想史

【最終学歴】東京大学大学院
【担当授業科目】生命論
【研究テーマ】生命観の歴史/生命の哲学/
ゲスト・フェヒナーの精神物理学



坂本 祐太

SAKAMOTO Yuta

Ph.D. in Linguistics
准教授

研究
分野 言語学(生成文法理論・統語論)

【最終学歴】米国コネティカット大学大学院
【担当授業科目】言語学
【研究テーマ】自然言語における照応現象に関する比較統語論的研究



施 利平

SHI Liping

博士(人間科学)
教授

研究
分野 家族・親族の構造と関係

【最終学歴】大阪大学大学院
【担当授業科目】家族社会学
【研究テーマ】夫婦の伴侶性、
親子・親族関係の歴史的・国際的比較



鈴木 健

SUZUKI Takeshi

Ph.D.
教授

研究
分野 メディア批評とカルチュラル・スタディーズ/
政治コミュニケーション

【最終学歴】ノースウエスタン大学大学院
【担当授業科目】説得コミュニケーション論
【研究テーマ】メディア批評/
アメリカと日本の政治コミュニケーション論



根橋 玲子

NEBASHI Reiko

Ph.D.
教授

研究
分野 コミュニケーション学
(異文化間コミュニケーション)

【最終学歴】ミシガン州立大学大学院
【担当授業科目】異文化間コミュニケーション
【研究テーマ】異文化理解・多文化共生・
移動する人々の生活とキャリア



蛭川 立

HIRUKAWA Tatsu

准教授

研究
分野 人類学/意識研究

【最終学歴】東京大学大学院
【担当授業科目】人類学と意識科学
【研究テーマ】変性意識状態と変則的体験、
シャーマニズムや瞑想などの身体技法とそのコスモロジー



宮本 真也

MIYAMOTO Shinya

教授

研究
分野 社会学/社会哲学

【最終学歴】大阪大学大学院
【担当授業科目】現代思想論/集約型外国文献講読(ドイツ語)
【研究テーマ】承認とコミュニケーションを軸とした批判的社会理論、社会的な病理的分析・批判



山口 生史

YAMAGUCHI Ikushi

博士(学術)
教授

研究
分野 コミュニケーション学(組織コミュニケーション)
/組織行動学

【最終学歴】国際基督教大学大学院
【担当授業科目】組織コミュニケーション論
【研究テーマ】組織コミュニケーション学と組織行動学の関連



脇本 竜太郎

WAKIMOTO Ryutarou

博士(教育学)
准教授

研究
分野 社会心理学

【最終学歴】東京大学大学院
【担当授業科目】社会心理学
【研究テーマ】防衛性と社会的行動の関連、
子育てについての信念